2025/03/15

加藤周一現代思想研究センター研究員　半田侑子

第 55 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を読む

【第８段落】

停車場で出会った彼女は、住み慣れた都会で、イタリアでよりも selbst-sicher（自信がある）であるようにみえた。私の宿は旧市内の便利なところにとってあり、西停車場からその宿へ向う途中、市街の地理を手みじかに説明してくれた。その説明は、耳慣れぬ固有名詞を沢山含んでいて、私にはよくわからなかったが、「スターリン広場」とか「赤軍の橋」とかいう名まえだけは、記憶に残った。後になって、そういう名まえが市電の標識や地図の上に書いてはあるが、市民の誰もそうは言わず、旧名の《シュヴァルツェンベルクプラッツ》や《ライヒスブリュッケ》を用いて暮らしていることに気がついた。（さらに後になって、占領が終り、外国の軍隊がヴィーンを去ったとき、果して、その翌日から、押しつけられた名まえは消えて、旧名が公然と復活した）。国立歌劇場をはじめ使用に堪えぬ建物は多かったが、廃墟は少かった。商店には品物が並んでいて、街はようやく戦争の荒廃から抜けだそうとしているようにみえた。武装した赤軍の兵士が、二人連れ立って、影のように吹雪のなかからあらわれては、また吹雪のなかに消えていった。

（１）「スターリン広場」→シュヴァルツェンベルクプラッツ

「赤軍の橋」→ライヒスブリュッケ

参考：「立命館大学図書館／加藤周一現代思想研究センターデジタルアーカイブ」

〔詩作ノート〕〔1953 頃〕

【684－2】

「Zwei Wochen in Österreich〔オーストリアでの二週間〕」の一部

https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/catalog/mp000464

e)Stalin platz〔スターリン広場〕

Brücke der Rote Armee.〔赤軍の橋〕

Sowjetisches Information zentrum〔ソヴィエト情報センター〕

Drapeau range dans le ciel neigeant Tricolore. U.S.A. Anglais〔旗が雪の降る空に並ぶ。三色旗、アメリカ、イギリス〕

Ces drapeaux et ce peuple qui semble apathique〔この３つの旗とここの民衆は、無気力に見える〕

（２）ウィーン国立歌劇場…Wiener Staatsoper→第９段落（１）

【第９段落】

国立の歌劇団は、本来の劇場が使えなかったので、テアタ・アン・デァ・ヴィーンで公演をしていた。私たちはそこで、ヴァーグナーやアルバン・ベルクを聞いた。かりの劇場は豪華なものではなかった。しかしそのなかには、音楽の質と聴衆の熱狂があった。ほとんどその町の人々の生きがいがあったとさえいえるかもしれない。生活は苦しかったはずである。しかしそれにも拘らずではなく、それ故にこそ、劇的音楽は、単なる愉しみではなくて、感情生活の中心に係る何ものかになっていたのだろう。その晩の興奮のさめないまま、劇場の外へ出ると、街は暗く、ただ「ソヴィエット情報本部」の赤い文字だけが、暗い夜空に鮮かに輝いていた。

（１） テアタ・アン・デァ・ヴィーン→次章「音楽」

「国立の歌劇団」の「本来の劇場」は、ヴィーン国立歌劇場 Wiener Staatsoper だが同劇場は 1945 年 3 月 12 日に連合軍の爆撃によって破壊され、加藤がウィーンを訪れた 1952 年にはいまだ再建されていなかった。国立歌劇場が再建され、公演が再開されるのは 1955 年 11 月 5 日のことである。国立歌劇場が使えないあいだ、主としてテアター・アン・デァ・ヴィーンを使って歌劇公演を続けた。

（２）①ヴァーグナー（1813-1883）→次章「音楽」に詳しく描写される。

②アルバン・ベルク（1885-1935）→「現代オペラの問題」(『自選集』第 1 巻所収)に加藤はアルバン・ベルク《ヴォツェック》に触れる。鷲巣力は『加藤周一を読む――理の人にして情の人』(岩波書店、2011）において、ワーグナーとアルバン・ベルクを対比させる形で記述している(68-70 頁)ので、詳しい解説は次章に譲りたい。

（３）「ソヴィエット情報本部」→第８段落（１）参照。

【第 10 段落】

私たちはまた、街を歩きまわり、美術館へ行ってブロイゲルを見、旧式の珈琲店に入って凍える手足をあたためた。珈琲店の広い部屋のなかには、ほとんど客がいなくて、ひっそりと静まりかえり、年とった給仕が手もちぶさたに片隅の椅子にかけて、私たちの方を見ていた。また市電に乗り、カルル・マルクス・ホーフの労働者住宅のまえをとおり――第一次大戦後のいわゆるアウストロ・マルクシスムスを記念するその名まえは、独墺合併と戦争から生きのびていた――グリンツィンクのぶどう酒の町へ行ったこともある。その町の建物の屋根は低くできていて、厚い壁に抉った窓は、舗道に積った雪とすれすれのところに開いていた。二重窓のくもった硝子、黄色く澄んだその窓の光、かすかに聞える内側のざわめきと提琴の歌……街燈のつくる明るい円錐のなかで、降りしきる雪の粉は輝き、風に流れ、絶えまなく舞っていた。それほど美しい雪の町を私は見たことがない、そのまえにも、あとにも。一杯の白ぶどう酒とひとりの娘は、私の世界を無限に美しくしていた。

（1）「美術館へ行ってブロイゲルを見」

①美術史美術館 Kunsthistorisches Museum

→歴代皇帝の収蔵品を収めたヨーロッパ屈指の美術館。

②ブロイゲル→ブリューゲル

大ブリューゲルの作品に『バベルの塔』『子どもの遊戯』『雪中の狩人』があり、ピーテル・ブリューゲル（子）の作品に『農夫と鳥の巣とり』『納屋での結婚式』があり、ヤン・ブリューゲル（父）の作品に『青い花瓶のなかの花束』などが所蔵されている。

（2）「アウストロ・マルクシスムス」
「アウストロ・マルクシスムス」は普通、「オーストリアマルクス主義」といわれる。科学的社会主義の理論雑誌『マルクス研究』やオーストリア社会民主党の機関誌『闘争』に拠った社会民主主義者のなかから発展したマルクス主義的潮流のことをいう。この潮流に属する人に、カール・レンナー、マックス・アドラー、ルドルフ・ヒルファーディング、オットー・バウアーらがいる。「労働運動統一のイデオロギー」を標榜したが、1918 年の 11 月革命のなかで、彼らはブルジョアジーとの連合政権の道を選んだ。第一次大戦後に共産主義と社会民主主義とが対立するなかで、両者を調停しようとする。しかし、その妥協的姿勢によって、ファシズムが擡頭してくると、反ファシズム運動を指導する力を発揮できなかった。
（3）独墺合併→「アンシュルス」オーストリア併合
ナチス・ドイツによるオーストリア併合を指す。ヒトラーは 1938 年 3 月 12 日にドイツ軍をオーストリア国内に進駐させ、14 日にはドイツ＝オーストリア合邦を宣言。4 月 10 日に併合の是非を問う国民投票を行い、圧倒的賛意を得て併合を実現した。

Volksabstimmung und Großdeutscher Reichstag

Stimmzettel

Bist Du mit der am 13. März 1938 vollzogenen

Wiedervereinigung Österreichs mit dem Deutschen Reich

einverstanden und stimmst Du für die Liste unseres Führers

Adolf Hitler?

Ja

Nein

（併合の是非を問う国民投票用紙。「はい」が「いいえ」より大きい）

（4）グリンツインク→Grinzing〔グリンツィング〕
参考：「立命館大学図書館／加藤周一現代思想研究センターデジタルアーカイブ」
〔詩作ノート〕
① 【684-1】〔Schnee. Stadt park〕Grinzing と雪という言葉が書かれる。
https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/catalog/mp000463

② 【684-7】〔詩作ノート〕「Grinzing」
https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/catalog/mp000469
Grinzing〔グリンツィング〕
雪のみちは凍っていた

林の影は黒く
教会の高い塔は
日暮れの空にささっていた

あたゝかい部屋
田舎の町の陽気な酒屋で
外がさむかったから
なかは陽気だった

のんきそうな家族づれ
酔いの廻ったお客のなかで
外が暗かったから
なかは大さわぎだった

あの言葉　四分の三拍子
新しいぶどう酒の香り
お前はいった
ぼくがたのしそうだと

しかしあれはたのしすぎた
お前はそれを知っていた
あまりたのしいときにはかなしいことを
あまり陽気なときにはさびしいことを

あゝぼくらは幸福だった
そういう日がまた来ないだろうことを知りながら
ぼくらは明日を語らなかった
その日がいつまでもつづくかのように

③ 「旅と芸術とオーストリア――ヴィーン季題」『加藤周一世界漫遊記』(毎日新聞社、1964)所収
「しかしヴィーンの冬の思い出は雪と結びついている。グリンツィックの酒場の低い軒の屋根近くまでつもっていた雪。夜おそく街灯の光の円のなかに舞っていた吹雪。ソ連の兵士をのせたジープが、その吹雪のなかをときどき通りすぎた。それはまだ四国占領下で、多くの家は暖房に乏しかったから、からだをあたためるには、しかるべき酒場でぶどう酒を飲むか、かたく抱き合う他はなかった……。」(156 頁)」

【第 11・12・13 段落】
毎晩おそく私は彼女を家まで送っていった。その家の重い大きな扉は、鍵を廻しながら、力を入れて押すと、かすかに軋りながら、開いた。私たちはもう一度接吻し、翌日を約して、別れた。
私はヴィーンに一週間いた、それから予定をのばして二週間いた。しかしいつまでもそこにいることはできなかった。それで再び西停車場へ戻り、パリ行きの「オリエント・エクスプレス」に乗った。駅まで送って来た彼女は、何も言わず、大きく潤んだ眼をみひらいて、車の窓の下に立っていた。列車が静かにすべり出したときに、彼女は身をひるがえして、反対の方向へ歩み去り、一度もたち止らず、一度もふり返らなかった。窓から乗りだしてその後ろ姿を見送ったときに、私ははじめて、私が彼女を愛しているということに気がついた。
それは新しい経験であった。夜となく昼となく、私は彼女のことを考えた。その眼の輝き、その髪の手触り、その言葉の抑揚の微妙な変化、トスカナの太陽とドーナウの岸の吹雪……すでに、想い出せばかぎりのない過去があった。その過去は、ヴィーン西停車場で中断されてはいたが、決してそこで終っていたのではなく、想像することのできるあらゆる未来につながっていた。私はみずから、私の世界の中心にひとりの娘、すなわち「他人」が入ってきた、ということにおどろいた。世界の秩序は、そのために変わらざるをえない。そういうことは、それまでの私の生涯にはなかった。私は、京都の女を愛していたのではなく、愛していると思っていたにすぎないということ、あるいは愛したいと思っていたにすぎないことを、実にはっきりと理解するようになった。しかし私は次の機会を捉えて、ヴィーンへ再び出かけることしか考えていなかった。

（1） ヒルダとの出会い

① 「窓から乗りだしてその後ろ姿を見送ったときに、私ははじめて、私が彼女を愛しているということに気がついた」→新しい経験。

② 「想い出せば限りのない過去」
→第 4 段落「そのまま別れたくないと思うのに充分なほど、私たちの間には共通の過去があった。フィレンツェの丘の午後と、シエナの一日。しかしそれは、旅程を変え、ローマまたはヴェネツィアをあきらめるのに充分なほど、長い過去ではなかった。そのとき未来を考えていなかった私は、純粋に感覚的な現在を生きていたのだろう。」との対比。

③ 「想像することのできるあらゆる未来につながっていた。私はみずから、私の世界の中心にひとりの娘、すなわち「他人」が入ってきた、ということにおどろいた。世界の秩序は、そのために変わらざるをえない。そういうことは、それまでの私の生涯にはなかった。」
⇨母の死によって加藤の世界は変わった。しかしヒルダと会い、加藤の世界におそらくはじめて「他人」が入ってきた。

⇨「はっきりした記憶は、夜ひとりになると、その顔や、その言葉が、秩序なく甦り、そのすべてを失ったということ、そのすべてがかえらぬということが、実に堪え難く感じられたということだ けである。私の世界からは、無限の愛情の中心が消えてなくなり、世界はもはや私にとってどうなってもよいものにすぎなくなった。」(「京都の庭」『続羊の歌』45-46 頁)

加藤はヲリ子が「無限の愛情の中心」であり、彼女の死によって「世界のいわば重心が変った」と述べる。それは「無条件の信頼と愛情のあり得た世界から、そういうものの二度とあり得ないだろうもう一つの世界」への移行であった。ヒルダとの出会いは母亡き後、「無限の愛情の中心」を失った加藤にとって、はじめて世界に、しかも中心に「他人」が入ってきたという重要な出来事だった。

④ 「私は、京都の女を愛していたのではなく、愛していると思っていたにすぎないということ、あるいは愛したいと思っていたにすぎないことを、実にはっきりと理解するようになった」

→この愛の描き方は、有島武郎『惜みなく愛は奪ふ』の一節「神を知ったと思っていた私は、神を知ったと思っていたことを知った。私の動乱はそこから芽生えはじめた」を彷彿とさせる。「けれども私は本当は神を知ってはいなかったのだ。神を知り神によりすがると宣言した手前、強いて私の言行をその宣言にあてはめていたに過ぎなかったのだ」という有島の言は、加藤の愛をめぐる偽善と同じ構造を持っているように見える。(半田侑子「近代日本知識人の「母」 : 加藤周一の母・ヲリ子と「無限の愛情の中心」」『加藤周一現代思想研究センター』創刊号、140 頁)

(2) 参考:「立命館大学図書館/加藤周一現代思想研究センターデジタルアーカイブ」

①【684-9】Le ciel gris (Paris-1) 〔灰色の空(パリ－1)〕

https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/catalog/mp000471

そこにはもうかえってこない日の
のぞみとことばと眼ざしがあった
ぼくはひとりでうら町を歩き
つめたい石の建物の
壁と壁との間にみえる
遠い空をながめていた
そこにはもうかえってこない日の
のぞみとことばと眼ざしがあった

そこには灰色の雲が広がり
失ったすべてのものがひろがっていた
ぼくは歩こうと少しも思わず

それでも歩き　歩きながら
どこにいるのか
知らなかった
そこには灰色の雲がひろがり
失ったすべてのものがひろがっていた

ぼくは周りをみていなかった
パン屋があり　パン屋がなかった
牛乳屋の店に牛の絵があり　牛の絵がなかった
牛は笑っていた　しかし笑っていなかった
ぼくは生きていた　生きていることを感じていたが
生きているということの他になにも感じていなかった
ぼくはこゝにいた
しかしすべてはそこにあった

あゝ　そのとき　灰色の空は
ぼくのなかへ入ってきたのだ
ぼくは拡り
もうかえってこない日のぼくとなり
その日には知らなかった　かぎりない
愛の流れとなった
あゝ　そのとき　灰色の空は
ぼくのなかへ入ってきたのだ

ぼくは手を拡げようとした
すると気がついた
もう何一つないということに
肩も　胸も　波うつ髪も
風も　歌も　その日も
ぼくはたっていた
うら町に
その町の灰色の空は遠かった

②【684－10】Absence (Paris)　〔不在（パリ）〕
https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/catalog/mp000472
おまえは話しかける　おもいがけないときに

しごとをはじめようと
机に向うとき
おまえは遠いヴェルサイユの庭の
運河のほとりへ
ぼくをつれてゆく
草の匂いのなかで
あゝ今日は美しい日だという

窓の外のひとかけの空がめに入り
国のことを思うとき
おまえは暗いステファンスキルエ〔シュテファン大聖堂〕の
柱のかげへ
ぼくをつれてゆく
神を信ぜず
愛はどんな道徳よりもつよいという

ただひとり寝床に入り
眠ろうとするとき
おまえは明るい地中海の
波の上へ
ぼくをつれてゆく
しぶきをあびながら
私たちの他には誰もいないという

おまえは話しかける　おもいがけないときに
仕事と●と休息を奪う小さな悪まよ
もしそうできるなら　ぼくはおまえを
憎んだはずだろう
ぼくは憎まなかった
だから愛した

おまえは話しかけるのをやめない
おもいがけないときに…

【第 14 段落】

その機会は、春とともにやって来た。ある国際会議がヴィーンでひらかれ、日本からの代表がパリで同行する通訳をもとめていた。会議は英仏語を用い、旅程は西ドイツの都会を廻るようにできていた。その頃私はドイツ語もいくらか解するようになっていたので、その仕事を引きうけ、今度はベルリンからヴィーンに入った。五月のシュタットパルクには草花が咲き乱れ、いわゆる「ヴィーンの森」には、新緑が煙っていた。シェーンブルンのバロックの宮殿のまえでは、モーツァルトの歌と管弦楽が、夕暮の空の下で優雅な楽天主義を撒きちらしていた。私たちは幸福だった。そしてその幸福をその場かぎりに終わらせまいと決心していた。しかし具体的な計画があったわけではない。未来は確かにあるはずだったが、漠然としていた。従って具体的な困難や来るべき障害について私が思い患うということはなかった。

（1） シュタットパルク

① 参考：「立命館大学図書館／加藤周一現代思想研究センターデジタルアーカイブ」【684-1】〔Schnee. Stadt park〕

Neige (Stadtpark)　〔シュタット・パルク〕
雪はいつも
ぼくらを二人だけにした
雲はいつも
ぼくらから外のものをかくした

町を、教会を、人の好奇心を、
嫉妬にもとづく道徳を、
ぼくらの昔みた空を
またいつかみるだろう空を

雪はいつも
ぼくらをつゝみ、
ぼくら自身を忘れさせた
ぼくらを凍えさせ
ぼくら自身を燃えさせた

そしておまえの髪、おまえの顔
おまえのまつげにかゝった雪は
あゝいつも

ぼくの唇の下でとけていった

② 「旅と芸術とオーストリア――ヴィーン季題」『加藤周一世界漫遊記』(毎日新聞社、1964）所収

「ヴィーンの春は、花咲き乱れるシュタット・パルクがよい。〔…〕ニューヨークのセントラル・パークや、東京の上野公園は、格別の用もないのに、真夜中にひとりで（またはふたりで）散歩するのに、適当な場所とはいえないだろう。パリのリュクサンブール公園は、夜は門を閉じる。同じヴィーンでも、真夜中のプラータ（これももう一つの公園である）は、ひとり歩きの必ずしも愉快な場所ではない。わが庭を行くがごとき思いは、ただシュタット・パルクの春の夜にかぎるのである。」（154 頁）

（2） シェーンブルン宮殿

（3）「私たちは幸福だった。そしてその幸福をその場かぎりに終わらせまいと決心していた。しかし具体的な計画があったわけではない。未来は確かにあるはずだったが、漠然としていた。従って具体的な困難や来るべき障害について私が思い患うということはなかった。」→鷲巣力『加藤周一はいかにして加藤周一となったか――『羊の歌』を精読する』（岩波書

店、2018）が刊行され、最初の妻・綾子との結婚が知られるようになった現在の読者としては、「具体的な困難や来るべき障害」について思い患うことは山ほどあるのでは？？？という疑問を抱かざるを得ない。だが、おそらくここでの文章の含意は、未来を考えるようになったが、まだ現実として具体的に想像するに至らなかったということだろうか。

一方で第 10 段落（３）で引用した詩 Grinzing〔グリンツィング〕に下記の一節がある。

しかしあれはたのしすぎた
お前はそれを知っていた
あまりたのしいときにはかなしいことを
あまり陽気なときにはさびしいことを

あゝぼくらは幸福だった
そういう日がまた来ないだろうことを知りながら
ぼくらは明日を語らなかった
その日がいつまでもつづくかのように

この詩からは、加藤とヒルダの幸福な様子と、その幸福を長続きさせるために多大な努力が必要なことを、加藤は頭の片隅でいつも意識していたのではないかというようにも受け取れる。〔詩作ノート〕には次章「音楽」で取り上げられる「トリスタンとイゾルデ」を観劇した時のことをうたった詩も綴られている。

【第 15 段落】

そのとき私は市内のホテル・ザッハーに泊っていたが、そこには亡びた帝国の嘗ての豪奢が残っていた。厚い絨緞と、時代物の家具、壁には古い油絵があり、金色の装飾が天井や窓枠や扉を飾っていた。階下の食堂では、年をとった婦人がひとりで珈琲をすすり、観光の米国人夫婦が地図を拡げ、人品卑しからぬ老人が、拡大めがねを手にして、新聞を読んでいた。ある朝私はそこで朝食を註文し、備えつけの新聞をとりあげて、はじめてベルリンの暴動のことを知ったのである。教会の両側の市民が、東側で赤旗をひきずりおろし、やぶり裂いたという。その「反共」暴動に参加した市民の数は、米国の新聞《ヘラルド・トリビューン》の欧州版によれば、ロンドンの《タイムズ》の数字の何倍にもなるはずであった……。

（1） ホテル・ザッハー

（2）ベルリンの暴動→東ベルリン暴動

1953 年 6 月 17 日に起きた東ベルリン暴動のこと。同年の 3 月にスターリンが死去、スターリン死後最初の大規模な暴動。抗議運動が大規模な暴動につながる。その前日の 16 日、東ベルリンの一工場で「労働ノルマ」引き上げに反対するストライキが起き、それが暴動化すると、東ドイツに駐留するソ連軍が出動して鎮圧しようとした。暴動はベルリンにとどまらず、東ドイツ全域に広がり、ソ連軍の司令官は戦車を出動させ、戒厳令を敷いた。労働者の要求は当初の経済的要求から、次第に「自由」をもとめる反政府・反ソ連運動に変化していった。

【終わりに】この章の題名「冬の旅」について

この章は「冬の旅」という題名が付されている。「冬の旅」といえば、もちろんシューベルトの美しい歌曲集のことだろう。しかしミュラーによるこの詩は失恋した青年の心情を歌っている。印象的なのは最初の「おやすみ」の一節「私はよそ者としてやってきて、よそ者として去る」である。

二週間のウィーンへの旅行が単純に冬の旅であったかもしれない。しかし加藤がおそらく生涯忘れなかっただろうヒルダとの幸福な時間を描いた章に、この美しいが悲しみに満ちた歌曲集を連想させる題名をなぜ付けたのか、と疑問に思う。

以上